

サン・テグジュペリの『母への手紙』の内容と解説

加 藤 宏 幸

アントワーヌ・ド・サンテグジュペリの『母への手紙』¹⁾には、9歳のときから彼が死亡した44歳のときまでの間に書かれた次の110通の手紙が収められている。母宛101通、姉シモーヌ Simone (愛称 Monot) 宛3通、妹ガブリエル Gabrielle (愛称ディディー Didi) 宛3通、ピエール・ダゲー Pierre d'Agay (ガブリエルの夫) 宛1通、母とガブリエルとピエール宛2通。

アントワーヌの母マリー・ド・サン・テグジュペリ Marie de Saint-Exupéry は、この書簡集の「序文」*Prologue* で次のように語っている。「かわいがられた幼年時代から、神のもとにまで彼を厳しく導いたこの絶えざる闘いについて、彼のこれらの手紙は証言しています」²⁾。そして彼女は、この闘いについて、息子アントワーヌの生涯を11に区分して語っている。以下、この区分に即して、彼の生涯と関連づけながら彼の手紙について解説してみたい。

1. 「少年時代の喜びと思い出の証言」

1904年、アントワーヌの父は、妻と5人の子供を残して亡くなる。アントワーヌには、2人の姉マリー・マドレーヌ Marie-Madeleine とシモーヌ、弟フランソワ François と妹ガブリエルがいた。父の死後、一家はリヨン Lyon を離れ、リヨンの北東数10キロの所にある、母方の大おばトリコー夫人 Madame de Tricaud の所有するサン・モーリス・ド・レマン Saint-Maurice-de-Rémens の屋敷に移住する。

この屋敷には大きな庭園があり、そこには樅や菩提樹やリラが数多くあり、天文台や菜園もあった。アントワーヌは、この屋敷で、夢に満ちた素晴らしい少年時代を過ごした。

この時期、アントワーヌは住み込みの女性家庭教師に就いて勉強していたが、やがて学校に入り真剣に勉強しなければならない年齢に達する。1909年、サン・テグジュペリ夫人は家族をル・マン Le Mans に連れて行く。サルト Sarthe 県の県庁所在地であるこの町は、亡くなった彼女の夫が住んでいた所であり、そこには彼の両親がまだ住んでいた。また、

1) SAINT-EXUPÉRY (Antoine de), *Lettres à sa mère*, Paris, Gallimard, [©1984], 226p.

2) *Ibid.*, p.14.

ル・マンはイエズス会の有名なノートル・ダム・ド・サント・クロワ Notre-Dame-Sainte-Croix 高等中学校の所在地であり、リヨンにはこの高等中学校に勝るものはなかった。1909年10月7日、アントワーヌはこの高等中学校に半寄宿生として入学した。

ル・マンへの移住によって、彼の世界は一変した。小さな王様として自由に振舞ったサン・モーリス・ド・レマンのような世界はここには存在せず、厳しい現実立ち向かわなければならなかった。祖父のフェルナン・ド・サンテグジュペリ Fernand de Saint-Exupéry は厳格な人であり、甘えを許さず、ノートルダム・ド・サント・クロワ高等中学校の神父たちは、彼らの生徒に軍隊的規律を課した。権威や規律をそのときまで知らなかったアントワーヌは驚き、失望する。

母への最初の手紙。「ぼくの大好きなママ。／ぼくは万年筆を手に入れました。それで書きます。とてもよく書けます。明日はぼくのお祝いです。エマニュエルおじさんは、ぼくのお祝いに時計をくれると言っていました。だから、明日がぼくのお祝いであるとおじさんに書いてくれますか。木曜日に、ノートル・ダム・デュ・シェーヌへの巡礼があります。学校の人たちといっしょに行きます。とても悪い天気です。ずっと雨降りです。いただいた贈り物全部で、とてもきれいな祭壇を作りました。／さようなら。／大好きなママ、とてもお会いしたいです。／明日はぼくのお祝いです」³⁾ (ル・マン, 1910年6月11日)

エマニュエルおじさんは、母の兄弟でラ・モール La Môle 城館の所有主である。このとき、母はサン・モーリス・ド・レマンに滞在していた。

ル・マンにおける日々は陰うつであった。休暇が来ると、彼は決まってサン・モーリス・ド・レマンの「自由の王国」へ帰った。そこでは彼は、生気に満ちあふれた少年に戻った。

サン・モーリス・ド・レマンから7キロ離れたアンベリユー Ambérieu に、民間航空会社によって開発された芝草の飛行場があった。自転車に乗ってアントワーヌはほとんど毎日そこに通った。1912年7月の第2週のある日、テストパイロットのガブリエル・ヴロブレスキー Gabriel Wroblewski に頼んで初めて飛行機に乗せてもらった。それは素晴らしい体験であった。それ以後、彼の飛行機への情熱は生涯変わることはなかった。

1914年、第一次世界大戦が始まる。看護婦の免状を持っていたアントワーヌの母は、アンベリユー駅の病舎に婦長として勤める。アントワーヌと弟のフランソワは、サン・モーリス・ド・レマンからほぼ50キロ離れたヴィルフランシュ・シュール・ソーヌ Villefranche-sur-Saône のノートル・ダム・ド・モングレ Notre-Dame de Mongré 高等中学校に転校する。イエズス会修道士の先生たちが気にいらなかったし、負傷兵の看護に当たっている母と会うことができなかったので、彼と弟はそこに3カ月しか留まらない。1915年の初め

3) *Ibid.*, p.35.

に、彼は弟とともにル・マンに戻り、ノートル・ダム・ド・サント・クロワ高等中学校に再入学する。

学年を終えると、2人の兄弟はル・マンを去り、スイスのフリブール Fribourg にある、マリア会修道士の経営するヴィラ・サン・ジャン Villa Saint-Jean 高等中学校に転校する。

この時期に母へ宛てて書かれた2通の手紙が公表されている。1通目の手紙（フリブール、ヴィラ・サン・ジャン、1916年2月21日）では、母がフリブールに来ることを延期したことに對して、予定通りに来るようにと懇願している。2通目の手紙（フリブール、ヴィラ・サン・ジャン、1917年5月18日金曜日）では、病気のためサン・モーリス・ド・レマンに戻ってしまった弟のフランソワのことをボンヌヴィー夫人 Madame de Bonnevie から聞いたこと、大学入学資格試験の手続きが終了したことを母に知らせている。

心臓病の合併症を伴った関節リウマチにかかった弟のフランソワは、1917年7月10日に死亡する。アントワヌはボンヌヴィー夫人から弟の死が近いことを聞いたはずであるが、手紙には、「ボンヌヴィー夫人にお会いし、フランソワのことを知りました。かわいそうな青年！」⁴⁾とだけしか書かれていない。驚きと悲しみが述べられて当然であるが、それらの言葉は存在しない。しかし、25年後『戦闘パイロット』*Pilote de guerre* (1942)において、弟の最期について感動的に語っている。

大学入学資格試験に合格し、1917年10月にパリに出たアントワヌは、海軍兵学校 École navale の入学試験準備のため、ボシュエ学院 école Bossuet の寄宿生となり、サン・ルイ高等中学校 lycée Saint-Louis で専門的な数学の講義を1日10時間受ける。

[パリ、サン・ルイ高等中学校] から母宛に発信された手紙が12通公表されている。アントワヌは生活上のすべてのものに不足していたので、いろいろなものを送るように母に頼む。「松露の形をしたチョコレート菓子を作らせてください。この種のをたくさん送ってください。それを食べれば胃の調子がよくなるでしょう。」⁵⁾ ([パリ、サン・ルイ高等中学校、1917年])。「次のものを送ってくださいますか(ここでは買物の許可がフリブールのようにはありません)。／①山高帽一つ(むしろそれが買えるお金をジョルダン夫人宛に送ってください)。さらに①《ボト》練り歯磨き。②靴紐(アンベリューではなくリヨンで買ったもの。アンベリューのものはすぐ切れます)。③まだ12枚ありますが切手もお願いします(これはそんなに急ぎません)。④水夫のベレー帽」⁶⁾ ([パリ、1917年11月25日])

当時は第一次大戦下で、ドイツの飛行機が時々パリ上空に現れ、爆弾を投下した。戦時下のパリの様子が記されている。「陰うつでぱっとしない天気です。この頃夜は陰うつで、

4) *Ibid.*, pp.38-39.

5) *Ibid.*, p.41.

6) *Ibid.*, p.46.

パリ中が青く塗られています……。電車は青い明かりをつけ、サン・ルイ高等中学校では廊下の電灯が青く、要するに、奇妙な感じですが……。それに、これがドイツ野郎をとて困らせることになるとは思いません。しかし、そうかもしれません。今高い窓からパリを眺めると、まるでインクの大きなしみのようです。反射光一つなく、光輪一つありません。見事な無光度です！」⁷⁾ ([パリ, サン・ルイ高等中学校, 1917年])

聖書を読んだ感動を伝える。「今聖書を少し読み終えたところです。文体はなんて見事で、なんて力強くて簡潔なんでしょう。そこここに素晴らしい詩情が見出せます。たっぶり25ページにわたる戒律は、立法と良識の傑作です。いたる所に、道德の教えがその有用性と美の中で輝いています。それはほんとうに素晴らしい」⁸⁾ ([パリ, サン・ルイ高等中学校, 1917年])

母に対する率直な愛情の表明。「私があなをどんなに愛しているか分かるでしょう。大好きなママ」⁹⁾ ([パリ, サン・ルイ高等中学校, 1917年])。「私は精神的に見てとても健康であり、あなを心から愛しているあなと同じトニオでいつまでもありつづけるだろうと思います」¹⁰⁾ ([パリ, サン・ルイ高等中学校, 1917年])

1918年、ドイツ空軍によるパリ爆撃が激化して来た。「サン・ルイ高等中学校の最上級生たちは、ブル・ラ・レーヌ Bourg-la-Reine のラカナル Lakanal 高等中学校に移動させられた。この移動の理由の一つは、爆撃を見るために屋根の上に登ることが彼らの習慣となったためである」¹¹⁾

激化する戦闘の様子。「今夜はよい天気です。だから、ゴータ（ドイツの爆撃機——訳注）だ、起きろ、地下室へという叫びを間違いなく予想できます。ここに来て、一度弾幕射撃の音を聞けばいいのにも思います。暴風雨が時化の真ただ中にいるかのようですが、素晴らしいものです。ただ、外にいてはいけません。いたる所に落ちて来る破片に当たって死んでしまうからです。私たちは公園で破片をいくつか見つけました」¹²⁾ ([ラカナル, 1918年6月])

1919年6月、海軍兵学校の試験を受けるが、不合格となる。年齢制限があったため、海軍兵学校を再受験できず、美術学校 École des Beaux-Arts の建築科に登録する。建築には興味がなく、文学に夢中になり、ものを書くことに熱中する。

1920年、アントワーヌは兵役に服する年齢に達する。航空隊で兵役を務めることを願っ

7) *Ibid.*, p.47.

8) *Ibid.*, pp.47-48.

9) *Ibid.*, p.48.

10) *Ibid.*, p.52.

11) *Ibid.*, p.61 (書簡17の原注).

12) *Ibid.*, p.63.

ていた彼は、希望通りに、1921年4月9日、ストラスブール *Strasbourg* の南方数キロにあるヌオッフ *Neuhof* に基地を持つ戦闘機第2連隊に配属される。

同僚たちと離れ独りになるために、ストラスブール市内に部屋を借りようと思う。兵士の給料は1日50サンチームであったので、母に財政援助を願う。市内に引っ越す。「ストラスブールは魅力的な町です。大都会のすべての特徴を持ち、リヨンよりずっと大きな町です。アパートマンの浴室も電話も自由に使用できます。ストラスブールのもっともしゃれた通りにある夫婦の家です。フランス語は一言も分かりませんが律義な人たちです。部屋は豪華で、集中暖房があり、お湯が出て、電灯が二つ、洋服だんすが二つ、建物にはエレベーターがついていて、全部で月120フランです」¹³⁾ ([ストラスブール, 1921年])。飛行機を操縦できる日が待ち遠しい。「操縦できる 때가早く来ることを願っています。そうすれば完全に幸せになれるでしょう」¹⁴⁾ ([ストラスブール, 1921年])。

アントワヌは、第2航空連隊のビー *Billy* 隊長によって、航空力学の教師に任命される。「想像してみてください……パイロット候補生になるまで私は教師になるのです。5月26日から、内燃機関と航空力学に関する理論について講義します。私はクラスを持つこととなります——黒板があって、たくさんの生徒がいるでしょう？その後で《きっと》パイロット候補生となります」¹⁵⁾ ([ストラスブール, 1921年5月])。早くパイロット候補生になれるよう母にも助力を頼む。「私たちの隊長はビーという隊長です。彼を知っていますか。知っているなら、私を推薦するように頼んでください」¹⁶⁾ ([ストラスブール, 1921年5月])

アントワヌはパイロット候補生にしてくれるように願い出たが、なかなか承認されないので、憂うつになる。「少しずつ憂うつになって来ます。約1カ月後に、私が操縦できるかどうか分かります。私は志願しました」¹⁷⁾ ([ストラスブール, 1921年, 土曜日])。「モロッコへの志願兵を求めています。1カ月か3週間で受理されるでしょう。操縦できなければ、私は志願します」¹⁸⁾ ([ストラスブール, 1921年, 土曜日])

アントワヌはビー隊長に、民間パイロット免許を取得したいと申し出て承認される。初めて複座機に乗せてもらう。「私は完全に動転して、スパッド・エルブモン *Spad-Herbemont* 機から降りました。空間や距離や方向の観念が、上空で完全に支離滅裂になってしまいました。私が地上を探したとき、あるときは自分の上を見たり、あるときは自分の上を、右

13) *Ibid.*, p.94.

14) *Ibid.*, p.95.

15) *Ibid.*, p.96.

16) *Ibid.*, p.97.

17) *Ibid.*, p.100.

18) *Ibid.*, p.101.

を左を見たりしました。非常に高い所にいると思っていると、突然垂直の錐揉み状態となって地上に向かって落下していました。非常に低い所にいると思っていると、500馬力のエンジンで、2分間で1,000メートルの上空に吸い上げられていました。ダンスをしたり、左右に揺れたり、回転したりしました……。やれやれ！」¹⁹⁾([ストラスブール, 1921年, 5月])。スパッド・エルブモン機の単独操縦が、彼の強い願いであった。

操縦が可能となるためには、三つの解決方法があった。志願兵となって、1年あるいはそれ以上兵役に服し、軍隊の指導教官に就いて操縦を学ぶこと。モロッコへの配置転換を申し出て、そこの飛行中隊で操縦の修業をすること。お金がかかるけれども、民間パイロット免許を取得すること。まずアントワヌは、第3の解決法である民間パイロット免許の取得を目指すことにし、母にその旨を知らせたが、彼女はそれに賛成ではなかったようだ。しかし、彼は母を説得し、軍隊とヌオッフ空港を共用している民間航空会社の東部航空会社 *Compagnie Transaérienne de l'Est* と契約を結んだ。「私は《熟考し、問いただし、議論しました》。これからの2年間何かをしようとするれば、この解決法しかありません。結局、毎晩30分の自由時間しかありません。訓練でへとへとになっている私に、どうして勉強しろと言うのですか。また、どうして何らかのきちんとした生活をするようにと言うのですか。私は、東部航空会社と《すべての》取り決めをし、署名しました、等々……。すべて規定に合っています。《水曜日》に実習を開始します。約3週間か、1カ月続くでしょう」²⁰⁾([ストラスブール, 1921年5月])。免許を取得するには、200フランの大金が必要である。母はその金を息子に送るために、借金をせざるを得ない。

モロッコのラバト *Rabat* の第37航空連隊への配置転換の通知が届く。ストラスブールで過ごすのはもはや数日である。母をほめたたえる言葉。「あなたは本当に魅力的です。そのことを知ってくれたらと思います、ママ。私が知っている《ママ》の中でもっとも明敏です。あなたは絶対に幸福であるに値しますし、一日中ぶつぶつ不平を言ったり、わめき散らしたりするできの悪い大きな男の子を持つにふさわしい人ではありません。そうでしょう、ママ？」²¹⁾([ストラスブール, 1921年6月])

「エルブモン機で錐もみ降下や宙返りをすると必ず船酔い状態になります(しかし、このような困難なアクロバット飛行に慣れ始めています。)木の葉一枚揺れず、エンジンがうまく回転してくれるときの、ファルマン *Farman* 機での《家長》的な操縦。慎重で荘重な方向転換。無気力で投げやりな着陸——錐もみ飛行も宙返りもありません。——でも、私があれば操縦するのを待っていてください——エルブモン機です——いつまでも乗客で

19) *Ibid.*, p.102.

20) *Ibid.*, p.106.

21) *Ibid.*, p.113.

いる訳には行きません。……。ああ！素晴らしい飛行機です」²²⁾([ストラスブール, 1921年6月])

モロッコのカサブランカ Casablanca に到着し、第37飛行連隊に入隊する。フランスの緑の田園を懐かしむ。「愛するママ、花の咲いたりんごの木の下にお座りください。フランスではりんごの花が咲いているそうですから。そして、私の代わりに、ご自分の周りをよく眺めてください。緑色で魅力的にちがいません。それに、草があるし……。私には緑が欠けています。緑は心の糧です。緑はおだやかな物腰と静かな心を養ってくれます。人生からこの色を取り除けば、すぐにひからびて不愉快な気持ちになります」²³⁾([カサブランカ, 1921年])

母の手紙が跡絶えると、手紙をくれるように懇願する。「どうしてこんなに長い間、何の消息もなくほって置くのですか。それがどんなに苦しいかお分かりでしょう。／2週間も前から《1通の手紙》も受け取っていません！ママ！／不吉なことを想像して時を過ごしています。とても不幸です。ママ、手紙だけが私のすべてです！ディディーも誰も私に手紙をくれません。ここでは、以前よりもあなたのことを思う時間が多く、この孤独がずっと苦しく感じられます」²⁴⁾([カサブランカ, 1921年])

アントワヌの飛行距離も飛行時間も次第に延びて来る。1日300キロ、1日3時間飛行することが普通になる。毛裏のついた飛行服や毛裏のついた手袋をまとっていても、飛行中にあまりの寒さに泣くこともあった。このような飛行のことを母への手紙に記している。

この土地で、アントワヌは寂しかった。友人も話し相手もない。詩作もデッサンも止めてしまう。母からの手紙だけが唯一の慰めであった。

1922年1月、船でタンジェ Tanger からマルセイユ Marseille に戻る。「ねえ、ママ、今のモロッコは非常に暑いので、サン・モーリスでひどい気管支炎にかかるのではないかととても恐れています。私の部屋を暖かくしておいてください。病気になるなんてばからしいですから」²⁵⁾(郵船会社, [1922年])

休暇の後で、南フランスのイストル Istres にあるフランス軍のパイロット養成センターに入る。1922年4月3日、予備役士官候補生となり、ベリー Berry 地方、ブルジュ Bourges の東数キロにあるアヴォール Avord 教育センターに行く。22歳になっても、母は彼にとっては今だに精神的支えであった。「手紙をください。あなたの手紙は私を元気にしてくれます。それは私の心に届くすがすがしい風です。愛するママ、あなたが語るそんなにも甘美

22) *Ibid.*, p.115.

23) *Ibid.*, pp.122-123.

24) *Ibid.*, p.126.

25) *Ibid.*, p.136.

なことをどのようにして見つけるのですか」²⁶⁾ ([アヴォール基地, 1922年])。「あなたは私の生活の中のもっともよいものです。私は今夜、子供のようにホームシックにかかっています！あなたはそちらで歩いたり話したりしているし、私たちが一緒にいることだってできるのに、私はあなたの愛情に浴することもできず、またあなたの支えになることもできないのですから。／今夜泣きたいほど悲しいのは事実です。悲しいとき、あなただけが慰めであるのも事実です」²⁷⁾ ([アヴォール基地, 1922年])

アヴォール基地でのカリキュラムは、航空学・気象学・爆撃・武器の使用から成り立ち、飛行機の操縦はない。彼は飛びたくてたまらない。間もなく飛行訓練が許可される。ヴェルサイユ Versailles に移り、8月と9月の2カ月にわたる研修を受ける。研修の終わりに、ル・ブルジェ Le Bourget に基地のある第34連隊における兵役を選び、1922年10月、少尉としてそこに赴任する。

アントワーヌは、飛行手当を得ることができるようになったら結婚したいと思っていた。そのようなとき、彼の前にルイズ・ド・ヴィルモラン Louise de Vilmorin という名家の女性が現れた。サン・ルイ高等中学校で海軍兵学校の入学試験の準備をしていたときの級友の一人オノレ・デティエンヌ・ドルヴ Honoré d'Estienne d'Orves を通して、ヴィルモランを知り、ただちにほれてしまった。彼はヴィルモランの家庭環境が自分の家庭環境と全く異なっていることを認めたが、彼女に結婚の申し込みをした。家族はその結婚に強く反対したが、彼女は飛行家の妻となる決心をした。そして、二人は婚約した。

婚約中にアントワーヌは、飛行機事故を起こす。着陸に失敗し、頭蓋骨を骨折する。ヴィルモラン家の人たちが彼に職業を変えるように強く要求したので、1923年6月に、彼は飛行家という職業を棄てた。ヴィルモラン家の人たちが、彼のためにブワロン・タイル会社 Tuileries de Boiron の製造検査係の職を見つけてくれた。

1923年の夏、ヴィルモランの気持ちは少しずつアントワーヌから離れて行った。彼女の心を傷つけたのは家族の強い反対であった。彼女はよく考えた末に、アントワーヌと別れる決心をした。1923年の秋、二人の関係は終わった。

『母への手紙』のどこにもヴィルモランの名も彼女に関する記述もないが、彼女との別れの苦しみを述べたと思われる手紙が1通公表されている。その手紙の発信地はパリで、日付が [1923年10月] となっているので、彼女と別れた直後に書かれたものであると考えられる。「最近私は、つまらない心配のために内に閉じこもってしまいました。あなたを全面的に信頼し、子供だったときに私の不幸を何でも話したときのように、私の苦しみをあなたに話し慰めていただかなければならないことはよく分かっています。あなたが大きな

26) *Ibid.*, p.137.

27) *Ibid.*, p.138.

やんちゃな息子をとても愛していることも分かっています。私が気難しくなったからといって、あまり私を恨まないでください。私はつらい日々を過ごしました。今はそれを乗り越えました。私は勇気のある男です。』²⁸⁾([パリ]ヴィヴィエヌ通り22番地, [1923年10月])

2. 「物質的困難との闘い (パリ, 1924-1925年)」

この時期、アントワーヌは貧窮の中にあつた。「為替ほんとうにどうもありがとうございます。私の状況はとても悪く、引っ越しをしなければなりませんでしたので、家政婦や管理人などにさまざまなチップをあげなければなりませんでしたし、本や、トランクや荷物箱の運搬、さらに歯医者に300フラン、歯医者は後払いにしてくれなかったのです。——私の苦境はひどいものです。』²⁹⁾(プティ通り12番地, [パリ, 1924年])

また飛行機を操縦してみたいという欲求が募って来て、日曜日にはオルリー Orly にある民間パイロット訓練センターに行き、飛行機を操縦する。さらに、ブワロン・タイル会社での仕事がすんでから、少しずつ小説を書き続けた。「ママ、私の小説の半分ができました。その小説は新しくて簡潔だと堅く信じています。』³⁰⁾(プティ通り12番地, [パリ, 1924年])

「新しい職につけるかもしれません。自動車産業です。次のお金がもらえます。①固定給、年額12,000。②手数料、年額25,000。つまり《年額》3万から4万ですが、さらに《小型自動車が1台私に与えられる》ので、その車であなたとドライブできるでしょう。モノーもです。完全には来週にならなければ確実になりません、その場合には1週間の予定であなたのところに戻ります。あなたに頼らなくてもすむ独立した生活ができるようになるでしょう。1年以来初めて味わう喜びとなるでしょう。私は限りなく幸福になるでしょう。あなたもです」³¹⁾(パリ, オルナノ大通り70番地の2, [1924年])

1924年の終わりに、アントワーヌはパリ郊外のシュレンヌ Surenne にあるブワロン・タイル会社を辞め、ソーレ・トラック製造販売会社 Camions Saurer に就職し、生活が安定する。

母への手紙で、書き上げた物語をタイプして送ると述べているが、それは『飛行家』*L'Aviateur* である。「私の小説は少し停滞していますが、自らに課している一瞬一瞬の観察によって、内面的には著しく進歩しています。蓄え中です」³²⁾([パリ], オルナノ大通り70番地の2, [1924年])。もの書く人の心構え。「私は、人々が話したり書いたりするとき、わざとらしい結論を導き出すために、すぐにあらゆる思考を放棄してしまうということに気が付いた。

28) *Ibid.*, pp.144-145.

29) *Ibid.*, p.146.

30) *Ibid.*, p.147.

31) *Ibid.*, pp.151-152.

32) *Ibid.*, p.155.

彼らは、言葉をそこから真理が出て来る計算機のように使っている。それは愚かなことです。論証することではなく、もはや論証しないことを学ばなければなりません。何かを理解するために言葉を連ねる必要はありません。そうすると、すべてを歪めてしまうことになります。言葉を信用するからです³³⁾ ([パリ, 1924年])

アントワヌはソーレ・トラック製造販売会社のセールスマンとしてトラックの販売に従事し、地方巡りの旅を続ける。たくさんの田舎の人々と接触したが、彼らとどうしても打ち解けることができず、すっかり人間嫌いになってしまう。「誰かの中に自分の求めているものが見つからなくとも、私はもう苦しんだりすることはあり得ません。また、自分が興味あると思ったある人の考え方が、その本質を容易に見抜ける装置にすぎないことを発見してしまうと、いつも失望してしまいます。嫌悪を感じます。私はその人を恨みに思えます。たくさんのものやたくさんの人をふるい落としています。私はそうせすにはいられないのです³⁴⁾(局留め, モンリュソン(アリエ), [1925年])。「また、ほとんど手紙を書かないことで私を恨まないでください。日常生活はそんなに重要ではありませんし、とても似通っています。内面生活は語るのが難しく、ちょっと恥ずかしいものです。それについて話すのはとても気障です。私にとって内面生活だけがいかに重要なものであるか、あなたには想像できないでしょう。それは、他人に対する私の判断においてさえもすべての価値を変えてしまいます。もしそれが容易な同情にすぎないのであれば、《親切的な》男など私にはどうでもいいのです。私が考えたり見たりしていることの良心的で熟考された結果である私の書いたものの中に、あるがままの私を探してください³⁵⁾(局留め, モンリュソン(アリエ), [1925年])

この手紙以前に、彼は妹カプリエル宛に出した手紙で、田舎で出会った幾人かの人たちを厳しく批判したらしい。その手紙を読んだ母が、息子アントワヌ宛に、そのことで彼を強くたしなめる手紙を書いたらしい。母のその手紙に対して書かれたのがこの手紙であると考えられる。

アントワヌは、ルイズ・ド・ヴィルモンとの婚約解消の打撃から立ち直ることができずにいたし、トラックの販売も順調に行かず、憂うつな日々を過ごしていた。人間嫌いになり、厭世的になり、母にさえも八つ当たりすることになった。

このような手紙の後に、母に対する限りない愛情に満ちた手紙が出される。「ママ、うまく表現できませんが、私がどんなにあなたに感嘆し、どんなにあなたを愛しているか話さなければなりません。あなたの愛は非常に安らぎを与えてくれます。あなたの愛を理解す

33) *Ibid.*, p.157.

34) *Ibid.*, p.163.

35) *Ibid.*, p.164.

るためには長い時間が必要だと思います。ママ、毎日さらによくあなたの愛を理解しなければならぬし、私たちのために費やされたあなたの人生は報われなければなりません。私はあなたをあまりにも孤独の中に置いてしまいました。私はあなたのために立派な友だちにならなければなりません」³⁶⁾ ([パリ, 1925年])

3. 「砂との闘い (トールーズ Toulouse — ダカール Dakar, 1926年)」

アントワヌは15カ月間トラックのセールスマンとして働いたが、トラックは1台しか売れなかった。この仕事は自分に向いていないと判断し、ソーレ・トラック製造販売会社を退職する。彼がかつて在籍したボシュエ学院の副校長であるシュドゥール Sudour 神父の仲介で、フランス航空会社 Compagnie Aérienne Française に入社する。飛行機はまだ恐ろしいものと考えられていたので、客はほとんどなく、飛ぶことなく何日も過ぎる。

1926年の夏の初めに、姉マリー・マドレーヌが肺結核で死亡し、アントワヌは悲嘆に暮れる。ほとんど失業状態にあった彼は、今度もまたシュドゥール神父の紹介で、1926年10月、ラテコエール航空会社 Compagnie d'Aviation Latécoère に入社する。本社があるトゥールーズに赴任し、試験飛行を担当する。

スペインの山々の上を飛んだ3カ月の実習後、アントワヌはカサブランカ — ダカール路線に配属される。世界でもっとも乾燥した2,300キロにおよぶ海岸の上を飛ぶことになる。当時の飛行機は屋根もなく、無線もなく、エンジンは壊れ易かったので、長距離飛行は大きな危険を伴った。不時着や墜落がよく起こり、この時期までに多くの犠牲者が出ていた。「故障し砂漠に不時着し飛行機が破損しましたが、それ以外は旅行はうまく行きました。同僚が私たちを引き取りに来て、私たちは全世界から孤立した小さなフランスの砦に泊まりました。そこで指揮を取っていた軍曹は、数カ月以来ただ一人の白人にも会っていませんでした」³⁷⁾ ([ダカール, 1927年])

ダカールでは、すべてがアントワヌの気に入らなかった。彼の憂うつをいやしてくれるのは母からの手紙であった。「私は、1カ月以来あなたから何も受け取っていません。しかし、私はたびたび手紙を書きました。それでつらい思いをしています。あなたの一言がここに届いていたら大変嬉しかったのですが。なぜなら、愛するママ、あなたは私の心の偉大なる愛情ですから。遠くにいるからこそ、どんな友愛が避難所になるかが一層よく分かるし、あなたの一言、あなたの一つの思い出で、私の憂うつはいやされるのです」³⁸⁾ ([ダカール, 1927年])

36) *Ibid.*, p.166.

37) *Ibid.*, p.172.

38) *Ibid.*, p.173.

飛行の合間に、小説を少しずつ書く。「*N.R.F.* 誌のために大きなものを書いています、少しばかり私にかかわりのある物語です。完成したら、あなたの意見を聞くために送ります」³⁹⁾(ダカール, [1927年])

母に対する感謝の手紙。「でも愛するママ、考えてみてください、あなたは誰にもできなかったような優しきで私の人生を満たしてくれました。あなたは思い出のうちでもっとも《気分をさわやかにしてくれる》思い出であり、私の中にもっとも多くのもを目覚めさせてくれる思い出です。あなたのほんのちょっとしたものが、私の心を暖かくしてくれます。あなたのセーター、あなたの手袋、それらが保護してくれるのは私の心です」⁴⁰⁾(ダカール, [1927年])

アントワーヌがその上を飛行していた砂漠の周辺には、ムーア人の反抗部族が放浪していた。砂漠に不時着した郵便機のパイロットが、ムーア人に殺されたり、捕えられたり、拷問を受けたりすることがよくあった。義弟ピエール・ダゲ宛の手紙。「海岸に建てられたスペインの砦に住んでいて、危険なしに海まで行くことができます。少なくとも20メートルの距離です。1日に何度かこのような散歩をします。しかし、君が20メートル以上遠ざかると、銃撃を受けます。さらに、50メートルを越えると、先祖に出会いに行かされるか、奴隷として連れて行かれることになりますが、それは季節次第です。季節が春で、君がかわいいのであれば、サルタンの妃になることもあり得ます。それでも、それは死ぬよりはましです。偉大な宦官になることだってあり得ます。その方が厄介かもしれません」⁴¹⁾ ([着陸地, ジュビー, 1927年])。「去年われわれの仲間のパイロット(4人のうち)2人が殺されました。1,000キロにわたって、私は光栄にもやまうずらの雛のように撃たれることになるのです」⁴²⁾ ([着陸地, ジュビー, 1927年])

4. 「孤独との闘い (カップ・ジュビー Cap-Juby, 1927-1928年)」

1927年10月、アントワーヌは、スペイン領リオ・デ・オロ Rio de Oro の不帰順地区の真ただ中にあるカップ・ジュビーの飛行場長に任命された。彼は13カ月間そこに留まることになる。彼に任された役目は二つあった。郵便機の着陸の継続を求めるためスペイン総督と交渉すること、砂漠に不時着したパイロットと、できれば郵便物と飛行機も救出すること。

アントワーヌは、反抗部族との争いを少なくするため、部族の長とできるだけ接触する

39) *Ibid.*, p.177.

40) *Ibid.*, p.178.

41) *Ibid.*, p.180.

42) *Ibid.*, p.182.

ように努力した。その結果、非常に勇敢で多くのことを知っているこの白人の友をモール人は尊敬するようになった。「イスラム教の聖者が毎日アラブ語の授業をしに来てくれます。書き方を学んでいます。すでに少し上手になりました。モール人の首長たちに、社交的なお茶を差し上げています。すると今度は彼らが、今までいかなるスペイン人もまだ行ったことがなかった2キロ離れた不帰順地区の自分たちのテントに、お茶飲みを誘ってくれます」⁴³⁾(ジュビー、1927年)

カップ・ジュビーで『南方郵便機』 *Courrier Sud* を書き続ける。「少し本を読んでいます。本を書く決心をしました。すでにほぼ100ページ書き上げましたが、構成でかなり苦しんでいます。たくさんしたことや異なった観点をそこに書き込みたいと思っています。この本をあなたがどう考えるか自問しています」⁴⁴⁾([ジュビー、1927年末])

妹ディディー宛の手紙で、サハラ砂漠で行方不明になった郵便機の捜索について述べている。「われわれは、砂漠で行方不明になった2機の郵便機の捜索で、かなり素晴らしいことをしたところです。私に関して言えば、サハラ砂漠の上空を5日間で約8,000キロ飛びました。300人のアラブ人襲撃部隊によって、兎のように狙撃されました。恐ろしいことに何度も出会い、4回も不帰順地区に着陸し、事故のため一晩そこで過ごしました」⁴⁵⁾(ジュビー、1928年)

捕虜になった飛行士は、レーヌ Reine とセール Serre である。「さしあたり、彼らについては何も分かりませんし、生きていのかどうかさえ分かりません。それに、現在サハラ砂漠では大混乱が起こっていて、すべての遊牧民の部族が激しく戦っています。／ほんとうに、サン・モーリスとは異なっています」⁴⁶⁾([ジュビー、1928年])

1928年9月17日、アントワーヌは彼らを救出した。11月、やっとフランスに戻る事ができた。彼は、13カ月にわたる砂漠での生活において、4種類の人間について学んだ。パイロット、遊牧民のムーア人、謙虚なスペインの士官、そして自分自身について学んだ。さらに、彼はこの4種類の人間は互いに似通っていて、差異は表面的なものでしかないことに気がついた。人間は単一であると確信して砂漠から戻った。

1929年の春に、アントワーヌは、ブレスト Brest において海軍によって組織された航空技能講座に参加した。彼は母に『南方郵便機』の原稿を送った。「しかし、ほんとうに、私の小さな書物についてのあなたの手紙は、もっとも私の心を打った手紙です。だから、あなたにとっても会いたい。1カ月後に私の本が発売され始めたら2人でダックス Dax に行き

43) *Ibid.*, p.186

44) *Ibid.*, p.191.

45) *Ibid.*, p.194.

46) *Ibid.*, p.197.

ましよう。どうしてもそうしたいのです。とても悲しくて、身体が虫に食われたかのようです」⁴⁷⁾([プレスト, 1929年])

南米では、すでに5年前から、航空郵便会社 *Aéropostale* によって航空路の開拓が続けられていた。アントワヌは、航空郵便会社の子会社であるアルゼンチン航空会社 *Compagnie Aeroposta Argentina* の南米開発主任としてブエノス・アイレス *Buenos Aires* に派遣されることになり、船でそこに向かった。

5. 「ブエノス・アイレス《航空路》(1929-1931年)」

1929年10月12日、アントワヌはブエノス・アイレスに着いた。数週間経っても、この町に適應することができなかった。「私は、航空郵便会社の子会社である《アルゼンチン航空会社》の開発主任に任命されました(給料は約22万5,000フラン)。あなたは満足していると思いますが、私は少し悲しい気持ちです。昔の生活が大好きでした。／こんな生活をしていると、老化してしまいそうです」⁴⁸⁾(ブエノス・アイレス、マジェスティック・ホテル, 1929年10月25日)

アントワヌの指揮下において、まずアルゼンチン南部への航空路の開拓が行われた。アンデス山脈から吹き下ろす恐ろしい風によってあらゆる物が削り取られて裸になってしまった土地、石が飛び疾風が人を倒し、丈のごく短い草しか生えない土地、それがパタゴニア地方である。この土地に次々と飛行機の着陸地が建設され、最南端のホーン岬 *Cap Horn* の近くまで航空路が延長される。

南方への航空路だけでなく、北方への航空路も開拓される。北方への航空路は大密林の上空を通り、西方への航空路はアンデス山脈を横切り、太平洋岸のチリの首都に至る。パイロットは自然から身を守るほど十分な装備を整えておらず、飛行機はアンデス山脈を見下すほどの高度を取ることができず、エンジンはパタゴニア地方の突風に打ち勝つに十分な力を持っていない。パイロットは、故障で不時着したあるいは危険に陥った同僚を救出するためにたびたび飛び立たなければならなかった。

アントワヌが困難な飛行を終え家に帰り、夜しばしば思い出すのは、サン・モーリス・デ・レマンで過ごした少年時代のことであり、母の優しさである。「今までに私が知っているもっとも《よい》、もっとも穏やかな、もっとも親しみを感じるものは、サン・モーリスの上の部屋の小さなストーブです。私の生活でこれほど私を安心させてくれるものはありませんでした。夜目を覚ましたとき、ストーブは独楽のようにうなっており、壁によい陰をつくっていました。なぜか分かりませんが、忠実なブードル犬のことを考えました。あ

47) *Ibid.*, p.200.

48) *Ibid.*, p.204.

の小さなストーブは、あらゆるものから私たちを保護してくれました。ときどきあなたが上がって来て、ドアを開け、気持ちよい暖かさにわれわれが包まれているのを見ました。ストーブが勢いよくうなっているのを聞くと、あなたはまた降りて行きました」⁴⁹⁾(プエロス・アイレス, [1930年1月])。同じ手紙で、『夜間飛行』 *VoI de nuit*⁵⁰⁾という小説を書いている、と述べている。

1931年の初めにフランスに戻り、4月に、プエロス・アイレスで知り合ったコンスエロ・スンシン *Consuelo Suncin* と結婚した。結婚後、カサブランカ勤務となった。

6. 「不正との闘い (マリニャーヌ *Marignane*, 1932年)」

1932年8月、航空郵便会社の法的清算が行われ、政府の援助を受けて、エール・フランス *Air France* が設立される。管理当局の内部にさまざまな敵対関係が生じ、同僚の多くが会社を去る。彼らと連帯責任をとり、アントワヌも会社を辞める。そのため、彼は間もなく物資的困難に悩まされることになる。ラテコエール *Latécoère* 社にテストパイロットとして採用され、トゥールーズに赴任する。マリニャーヌに基地のあるマルセイユ *Marseille* — アルジェ *Alger* 水上機航空路に配置される。

同僚のパイロットの中には、『南方郵便機』と『夜間飛行』の出版に不満を抱いた者がいた。羨望からあるいは狭量から、彼らは自分たちの職業に関して作品を書いたことでアントワヌに恨みを抱いた。それは彼を非常に悲しませた。彼の母は次のように語っている。「本当の試練は彼の同僚の幾人かの無理解にあります。彼は自分の書物によって、彼らのために不朽の記念碑を建たのに、その書物によって、不審な人物としてではないとしても、素人として扱われることになるのです」⁵¹⁾(「序文」)

7. 「渇きとの闘い (リビア砂漠, 1935-1936年)」

アントワヌは、1935年4月から5月にかけて、「パリ・ソワール」*Paris-Soir* 紙の特派員としてロシアを旅行する。

彼は、アンドレ・ジャッピー *André Japy* が保持していたパリ — サイゴン *Saigon* 間87時間の飛行記録に挑戦する決意を固める。これには15万フランの賞金がかけている。1935年12月29日、機関士プレヴォ *Prévo* と乗り組んで出発する。ベンガジ *Benghazi* から出発して4時間後に、リビア砂漠に墜落する。5日間ほとんど何も食べも飲みもせずに砂漠を歩き続けて、隊商に救助される。このことは、1939年に出版された『人間の土地』*Terre*

49) *Ibid.*, pp.208-209.

50) 『夜間飛行』は1931年に出版され、フェミナ賞を獲得する(原注)。

51) *SAINT-EXUPÉRY, op.cit., p.21.*

des hommes で感動的に想起される。

「コンスエロのように自分を必要としている誰かを自分の背後に残してくるということは恐ろしいことです。帰って保護し守ってやりたいという激しい欲求を感じ、義務を果たすことを妨げるあの砂と格闘して爪を剥がしてもいいのです。いくつもの山だつて動かせるでしょう。しかし、私が必要としたのはあなたです。私を保護し守ってくれるのはあなたの役目でした。それで、私は子山羊のように勝手にあなたを呼んだのです。／私が帰ったのは少しはコンスエロのためですが、ママ、あなたによって帰ることができるのです。あなたはそんなに弱いのに、この点では守護天使であり、夜一人で私があなたに祈りを捧げるほどあなたが祝福に満ちていることを知っていましたか」⁵²⁾(カイロ, 1936年1月3日)

1936年8月の初旬、アントワヌは「ラントランジジャン」*L'Intransigent* 紙の特派員としてスペインに行き、内乱を取材する。1937年4月の後半には、「パリ・スワール」紙の特派員として再びスペインを訪れる。

1938年1月、船でニューヨークに渡り、2月15日、機関士プレヴォと共に、フェゴ諸島 *Terre de Feu* に向かってニューヨークを飛び立つ。グアテマラ *Guatemala* で離陸の際に事故を起こし、重傷を負う。3月にニューヨークに戻り、『人間の土地』を仕上げる。

8. 「人間との闘い (戦争, 1939年)」

1939年9月1日、宣戦が布告される。トゥールーズに動員されたサン・テグジュペリ大尉は、航空技術を講義する仕事を割り当てられるが、この仕事に満足できない。彼の母の「序文」に紹介されている、友人に宛てた手紙で、彼は語っている。「ここでは、私を航空学の指導教官のみならず重爆撃機の指導教官にもしたがついています。それで、私は息が詰まりそうで、不幸で、黙っていることしかできません。私を助けてください。私を戦闘機中隊に加わらせてください。君もよく知っているように、私は戦争は好きではありませんが、後方に留まって、自分の危険の分け前を取らずにいることは不可能です……。／《価値ある人たち》を安全にかくまっておかなければならないと主張することには、大きな知的不快感があります。参加することによってこそ、効果的な役割を果たすことができるのです。《価値ある人たち》が大地の塩であるならば、大地に混ざり合わなければなりません。孤立しているのであれば、《われわれ》とすることはできません。それでも《われわれ》と断言するのであれば、その人たちは卑劣漢です。／私の愛するすべてが脅かされているのです。プロヴァンス地方では、森が燃えれば卑劣漢でないすべての人たちはシャベルとつるはしを手に取ります。私は、愛と内面の宗教によって戦争をしたいのです。参加せずにいるこ

52) *Ibid.*, pp.214-215.

とはできません。できるだけ早く戦闘機中隊に加わらせてください」⁵³⁾ (「序文」)

奔走した結果、アントワーヌは、身体検査で不適格となったにもかかわらず、特別のはからいで、オルコント Orconte の 2 / 33 偵察飛行中隊に配属される。「ママ、戦争や未来に対する脅威が続けば続くほど、私の中で私が責任を負っている人々に対する心配がますます大きくなって来ます。すっきり見棄てられてしまった哀れな愛するコンスエロが限りなく哀れに思えます。もしいつか彼女が南仏へ避難して来たら、私の愛故に彼女をあなたの娘として迎えてください」⁵⁴⁾ ([オルコント, 1940年])。「イタリアのこの絶え間のない脅迫が私に苦痛を与えるのは、それがあなたがたを危険にさらすからです。私にはあなたの愛が限りなく必要です、大好きなママ、愛するママ。この地上で私が愛するすべてのものがどうして脅迫されなければならないのですか。戦争よりもずっと心配するのは、明日の世界です。破壊されたこれらすべての村、散り散りになったこれらの家族。死など私にはどうでもいいのです。でも、精神の共同体を傷つけることはしてもらいたくないのです」⁵⁵⁾ ([オルコント, 1940年])

1940年3月以来ドイツ軍の攻撃が激化し、アントワーヌの所属する2 / 33飛行中隊は新しい土地に向けて後退し、ついにアルジェ Alger に移る。「われわれはアルジェリアに向けて離陸します。あなたを愛し、接吻します。手紙を期待しないでください。今後手紙を書くことは不可能になるでしょう。しかし、私の愛情を忘れないでください」⁵⁶⁾ (ボルドー, 1940年6月)。アルジェに着いたときには、飛行中隊の搭乗員の3分の2が戦争の犠牲となってしまう。

1940年6月、フランスとドイツとの間で休戦条約が調印され、アントワーヌは動員解除になる。フランスに戻り家族に会い、12月にリスボン Lisbonne から船でアメリカに向かい、12月31日にニューヨークに着く。

9. 「人間との闘い (続き) (ニューヨーク, 1941年)」

出版社は、アントワーヌに、書物を書き、フランスとフランスの敗北についてアメリカ人に語るように勧めた。注文を受けて書くのは気が進まなかったが、何か書かなければならないと思った。フランスは卑法だとか、フランスは死んだとか、対独協力者を徹底的に粛清すべきだとか言うのを聞いて黙っているのは辛かったからであった。書物を書くように催促していたのは出版社だけではない。ヴィシー一派だと彼を非難する対独レジスタン

53) *Ibid.*, pp.24-25.

54) *Ibid.*, p.216.

55) *Ibid.*, p.217.

56) *Ibid.*, p.218.

スの組織の同胞たちは、書物を書いて弁明することを彼に要求していた。

1941年6月、アントワヌは『戦闘パイロット』*Pilote de guerre*の執筆に着手する。ロシアに侵入したドイツ軍が勝利を重ねている。この作品を書き上げて、フランスの戦いがいかなるものであったかアメリカ人に理解させなければならない。この作品は、1942年2月にアメリカで出版される。それは、戦争・フランス・人間について書かれた作品であり、多くのアメリカ人に読まれた。フランスの占領地域に届き、ドイツ軍の検閲に付されたが、出版は許可された。

アメリカが参戦するや否や、アントワヌは、あらゆる手段を利用して、自分の志願兵役を認めさせようとする。1942年11月6日、アメリカ軍とイギリス軍が北アフリカに上陸する。このニュースを聞いて、彼は興奮する。これによって、フランス奪回への基盤ができた。彼はアメリカ軍の一員に加えてくれるよう頼んだが、拒否された。そのとき、ベトアール Béthouard 将軍が、アフリカの軍隊のために武器調達にやって来た。彼は将軍を通してアメリカ当局に働きかけ、ついに移動証明書の入手に成功する。1943年3月、彼は船で北アフリカに向かってアメリカを去り、5月4日にアルジェに上陸する。

10. 「失望との闘い (アルジェ, 1943年)」

アントワヌは、すぐに昔の部隊へ復帰できるよう奔走し始める。ジロー Giraud 将軍がアメリカに対して働きかけてくれたが、アメリカ軍はなかなか承諾しない。ジロー将軍がアイゼンハワー Eisenhower 将軍に直接会い懇請した結果、アントワヌの復帰が許可される。

ニューヨークにおける党派に分かれのフランス人同士の争いもすさまじかったが、アルジェにおいては、その争いはもっと恐ろしかった。ジロー将軍派とド・ゴール de Gaulle 将軍派の争いが展開されていた。アントワヌには、その争いは耐えがたかった。

11. 「至高の闘い (ボルゴ Borgo, 1944年)」

1943年7月21日、フランス上空1万メートルを偵察飛行し、ローヌ河の谷を写真撮影し帰還する。8月1日、2回目の偵察飛行から帰還したとき、着陸に失敗する。それが原因で、P38 ライトニング Lightning 機を操縦できる年齢をはるかに超えていたアントワヌは飛行を禁止される。兵役復帰のためにあらゆる努力をしたが、すべて失敗する。頭ごなしの拒絶に出会っても落胆せず、入隊を求めてあらゆる手段を行使する。

「大好きなママ、ディディー、ピエール、私が心の底からこんなにも愛しているあなたがみんな、どうしていますか、元気ですか、どんな生活をしていますか、どんなことを考えていますか。この長い冬は、ほんとうに、ほんとうに悲しいですね。／しかしながら、

数カ月すればあなたの腕の中に入れて強く希望しています。愛するママ、親しいママ、優しいママ、あなたの家の炉端で、私の考えていることをすべて話し、できるだけ反論したりせずに議論し、人生のあらゆることに正しい判断をして来たあなたの話に耳を傾けながら……」⁵⁷⁾ (1943年)

1944年2月、アントワヌは、サルジニア Sardinie に基地のある、リオネル・シャサン Lionel Chassin 指揮下の第31爆撃飛行中隊に雇われたが、操縦はできなかった。彼は2/33飛行中隊への復帰をひたすら願っていた。ナポリ Naples に直接赴き、エーカー Eaker 将軍に直接会見し、2/33飛行中隊への再復帰と戦闘機操縦の許可を得る。P38 ライトニング機に乗り、偵察飛行を再開する。

1944年7月17日、飛行中隊はコルシカ島のボルゴ基地に移動する。母への最後の手紙。「愛するママ。／私のことはほんとうに安心してください。あなたがこの手紙を受取れますように。私はとても元気です。全く元気です。でも、こんなにも長い間会っていないので、とても悲しいです。それに、あなたのことが心配です、大好きな、なつかしい、愛するママ。この時代はほんとうに不幸です。／ディディーが家を失ったと聞いて、心がいたみます。ああ、ママ、彼女を助けてやりたい！でも『将来』は彼女はほんとうに私を当てるにできると思います。愛している人たちに、愛しているといつになったら言えるのでしょうか。／ママ、私が心の底からあなたに接吻するように、私にも接吻してください。／アントワヌ」⁵⁸⁾ ([ボルゴ, 1944年7月])

1944年7月31日、グルノーブル Grenoble, アヌシー Annecy 方面(夢に包まれた限りなく楽しい少年時代を過ごしたサン・モーリス・ド・ルマンの方向)へ偵察のために、8時30分に離陸した。6時間分の燃料しか積んでいなかったため、帰着は13時と予想された。13時30分になっても戻らなかった。ガソリンはあと1時間分しかなかった。14時になっても情報はなかった。14時30分が過ぎても帰還しなかった。もはや絶望であった。

マリー・ド・サン。テグジュペリ夫人は、『母への手紙』の「序文」において、息子アントワヌの生涯を11に区分して簡潔に解説している。そして、彼女はその最後で次のように述べている。「アントワヌは、よく驚嘆する幸福な子供でした。／生活上の数々の困難が彼を自覚のある人間にし、『航空路』が彼を英雄にし、作家にしました。／追放された生活がおそらく彼を聖者にしました。／しかし、英雄以上に、作家以上に、魔法使い以上に、

57) *Ibid.*, p.220. 1944年1月にクレルモン・フェラン Clermont-Ferrand 上空でアメリカ軍によってパラシュートで投下され、アルザス抵抗組織の隊長の一人ダングレ Dungler 氏の仲介で、サン・テグジュペリ夫人のもとに届いた手紙(原注)。

58) *Ibid.*, p.221. 母に宛てられたこの最後の手紙は、彼が行方不明になった1年後、すなわち1945年7月になって初めて母のもとに届いた(原注)。

聖者以上に、アントワヌをこんなにもわれわれに近づけてくれるものは、彼の無限のやさしさです。／《道を進んでいるとき、星がすり減ることはない。与えること、与えること、与えることが必要である》。／幼い子供のとき、彼は毛虫を踏みつぶさないように回り道をします。／雉鳩を飼いならすために樅の梢に登ります。／砂漠で、かもしかを飼いならします。／モール人を飼いならします。／沈黙の数年が過ぎた今日でもなお、人々を飼いならし続けています。／『飼いならすってどういうこと?』と星の王子さまは尋ねます。すると狐が答えます。『それは関係を作るとのことだよ』⁵⁹⁾ (『序文』)

母のこの言葉は息子アントワヌの生涯を簡潔に要約したものであり、また彼の優しい性質を明らかにしたものである。母へのすべての手紙にあふれているのは、母をそして家族を常に思い続ける優しさである。彼の小説作品のみならずルポルタージュや随想の根底に認められるのも人間に対する限りない優しさであり、それがわれわれを感動させるのである。

彼の「無限の優しさ」が特徴的に示されている作品は、1943年3月、彼の42歳のときに出版された『星の王子さま』 *Le Petit Prince* である。

砂漠に墜落した飛行士は、砂漠で不思議な王子に出会う。王子と親しくなるにつれて、なぜ王子が地球にやって来たかが次第に分かる。王子は自分の星に生まれ出たただ一つのバラの花、虚栄心の強い、気むずかしいバラの花と悶着を起こし、一緒にいることに耐え切れなくなり、バラの花を見棄てて星巡りの旅に出たのであった。

王子は地球上の砂漠に降り立つ。そこでヘビに出会う。『おれは船よりももっと遠くへおまえを運んで行くことができるんだ』と、ヘビが言った。ヘビは、金の腕輪のように小さな王子の足首に巻きついた。『おれのさわったやつをそいつが出て来た土地に返してやる』と、さらにヘビは言った⁶⁰⁾。ヘビの言った言葉の意味を王子ははっきりと理解する。ヘビがその毒で人を殺すと、その人はどんなに遠くまでも飛んで行くことのできる魂となる。王子は、ヘビの言った言葉を思い出すことになるであろう。

キツネが現れる。王子が「ぼくと遊んでくれない」と言うと、「君とは遊べない。ぼくは飼いならされていないから」とキツネが言う。王子には「飼いならす」*apprivoiser* という意味が理解できない。キツネはその意味を王子に説明する。「それは『絆をつくる』*créer des liens* ということなんだ。君はまだぼくにとっては、10万人の少年と全く同じ少年にすぎない。それでぼくは君を必要としない。君もまたぼくを必要としない。ぼくは君にとっては、10万人のキツネと同じキツネにすぎない。だがもし君がぼくを飼いならせば、ぼくたちはお互いを必要とするようになるんだ。君はぼくにとって、世界でこの世に一人しかいない

59) *Ibid.*, pp.30-31.

60) SAINT-EXUPÉRY, *Le Petit Prince* (*Bibliothèque de la Pléiade*, p.462).

人になるんだ」⁶¹⁾。「君がぼくを飼いならせば、ぼく的生活は日に照らされたように輝くだろう」⁶²⁾。キツネの説明を聞き、王子は「飼いならす」という意味を理解する。そして、王子はキツネを飼いならす。

「バラの花を見に行ってみなさい。君のバラの花がこの世に一つしかないものであることが分かるから」とキツネに言われて、王子はバラの花のところに行く。「『あなたがたは美しいけれど何物でもない』と、王子はバラの花たちに言いました。『あなたがたのために死ぬことはできない。もちろん普通の通行人なら、ぼくのバラの花はあなたがたに似ていると思うかもしれない。でも、ぼくのバラの花はただ一つだけ、あなたがたすべてより大切なんだ。というのは、ぼくが水をかけてやったバラの花だからだ。ガラスの器をかぶせてやったバラの花だからだ。チョウになるように2、3匹は殺さないでおいだが。不平も聞いてやったし、自慢も聞いてやったし、時には沈黙にさえ耳を傾けてやったバラの花だからだ』」⁶³⁾王子は、自分の星のバラの花が、自分にとってこの世に一つしかないものであることを理解する。

キツネは、別れの贈物として、次のような言葉を贈る。「心で見なければものはよく見えない。大切なものは目には見えない」⁶⁴⁾。そして、さらにキツネに言う。「君は君が飼いならしたのものには永久に責任が生じるのだ。君はバラの花に責任があるのだ……」⁶⁵⁾

キツネの話聞き、王子は自分にとってこの世に一つしかないバラの花に対して自分が義務を果たしていなかったことに気づき、深く反省する。王子は、その反省の上で、その義務を果たすことに努力するであろう。

王子は、地球に降りて来た一周年記念日に、「遠すぎるんだ。ぼくはこの体を運べないんだ。重すぎるんだ」⁶⁶⁾、「捨てられた古い皮 *une vieille écorce* のようになるんだ」⁶⁷⁾、「ぼくは花に責任があるんだ！ほんとうにか弱い花なんだ！」⁶⁸⁾という言葉を残して、ヘビのいる所に進んで行き、ヘビに噛まれて死ぬ。

王子は毒ヘビに噛まれて、命を絶った。「古い皮」である肉体を脱ぎ捨て、魂だけとなって自分のバラの花のもとに帰った。王子は、1年前に、その心を見抜かず、その表面的な様子でバラの花を判断し、気むずかしい、わがままな、虚栄心の強いバラの花を嫌い、その花から逃げたのであった。「君は君が飼いならしたのものには永久に責任があるんだ。君は

61) *Ibid.*, p.470.

62) *Ibid.*, p.470.

63) *Ibid.*, p.474.

64) *Ibid.*, p.474.

65) *Ibid.*, p.476.

66) *Ibid.*, p.491.

67) *Ibid.*, p.491.

68) *Ibid.*, p.492.

バラの花に責任があるんだ」とキツネに言われ、王子はバラの花を見棄てた行為を深く反省した。王子はバラの花の心を見ずして、その言動だけによって、バラの花を悪い花であるときめつけ、さらにバラの花から逃げさえもした。許しがたいこの過ちを償い、バラの花に対する義務を全うするために、王子は自殺という手段を取った。そうすることによって、王子は自分の肉体を脱ぎ捨て、自分の心だけをバラの花に与えたのである。

王子がバラの花に示した優しさこそ、サン・テグジュペリ夫人が言った「無限の優しさ」にほかならない。「無限の優しさ」そして「愛する者に対する責任」、これらが『母への手紙』の1通1通の中に示されている。

また、アントワーヌの母は、「序文」の最後で息子の次の言葉を引用している。《道を進んでいるとき、星がすり減ることはない。与えること、与えること、与えることが必要である》。アントワーヌは自分自身を郵便機による郵便物の運搬に、南米における航空路の開拓に、ドイツ占領下にいるフランス人の解放のために自分を与えた。さらに、人間を愛することに自分自身を与え続けた。

アントワーヌによれば、真の愛とは、愛する相手から何も求めずに愛することである。「真の愛は、その見返りとしてもはや何も期待はしないところに始まる。人間に人間に対する愛を教えるために、祈りの実行があんなにも重要なものとして示されるのは、祈りに対して答えはないからである」⁶⁹⁾。真の愛とは、与えるだけの愛であって、受け取る愛ではない。真の愛とは、「愛する」ということではなく、「愛さなければならない」ということである。与える愛が何らかの障害によって愛する人に届かない場合には、愛する人からの見返りは全く期待できない。このような状況においても愛し続けるとき、その愛は偉大である。アントワーヌが実践したのは、まさしくこのような愛であった。彼が愛したのは母と家族だけではなく、何よりも人間であった。

アントワーヌと深く関わり合い、彼の生活に、そして彼の文学影響を与えた女性が4人いる。それは、ルーズ・ド・ヴィルモラン、ルネ・ド・ソーシーヌ Renée de Saussine、コンスエロ・スンシン、母マリー・ド・サンテグジュペリである。

ヴィルモランについては、前にも述べたように、アントワーヌは彼女と婚約したにもかかわらず、パイロットという職業を理解できなかった彼女の家族の強い反対によって結婚するまでには至らなかった。結局、彼女自身大空を飛ぶことに情熱を傾けていたアントワーヌを理解できなかったのである。

69) SAINT-EXUPÉRY, *Citadelle* (Bibliothèque de la Pléiade, p.647).

アントワーヌがルネ・ド・ソーシーヌと知り合いになったのは、彼がサン・ルイ高等学校に在学していた1917年頃である。彼と彼女との関係については、『自分で勝手に作り上げた女友だちへ宛てた青年時代の手紙1923-1931』⁷⁰⁾の中に収められた、彼女に宛てて書かれた25通の手紙によって知ることができる。1923年から1931年まで、つまり23歳から31歳までに書かれたこれらの手紙には、その時々が多感な青年が体験した事柄だけではなく、リネット Rinette (ルネ・ド・ソーシーヌの愛称) に対するそこはかとない愛情の言葉が記されている。

「書簡7」(トゥールーズ, [1926年10月])において、アントワーヌは次のように語っている。「私はあなたのそばに来て座る。これもまた、おそらくあなたが許してくれないことだ。あなたをいら立たせることだ。しかし、私がそんなことを全く意に介さないことを知ってくれたらなあ。なぜなら、私は今夜自分の好きなようにあなたを作り上げてしまっているからだ。あなたがどんなに親切になっているかを知ってくれたらなあ。結局、これがあなたとできる唯一の会話なのだ。私が自分自身の中に作り上げる会話。あなたは忍耐づよい。頭がよくて、何でも理解してくれる。そして私はおしゃべりになる。これは素晴らしい。私は自分勝手に作り上げた女友だちに対して何という復讐をしているのだろうか」⁷¹⁾。親切で何でも理解してくれるリネット像を勝手に作り上げて、不親切で何も理解してくれない現実のリネットを皮肉たっぷりにとがめる。この時期の多くの手紙で、リネットの無情さを責め、手紙をくれるように催促している。

ヴィルモランと別れたのち、アントワーヌはソーシーヌに次第に愛情を抱くようになったが、彼女は彼の愛をあくまで受け入れようとしなかった。彼女もやはり上流階級の娘であり、彼にとっては高嶺の花でしかなかった。教養豊かな音楽家の彼女から彼は多くのものを得たし、彼女の方も彼から多くのものを得た。しかし、彼女もまたパイロットという職業に誇りを持っていたアントワーヌを十分に理解できなかった。

アントワーヌは1927年10月から1928年11月までスペイン領リオ・デ・オロの不帰順地区の真ただ中にあるカップ・ジュビーの飛行場長をしていたが、その時期に『南方郵便機』を書いた。この作品に登場する一女性、パイロットのベルニス Bernis と駆け落ちするが結局は夫のもとに戻って行くジュヌヴィエヴ Geneviève のモデルは、ソーシーヌであると考えることができるのであろう。

アントワーヌと深く関わった3番目の女性はコンスエロ・スンシンである。1930年9月

70) SAIN-EXUPÉRY (Antoine de), *Lettres de jeunesse à l'amie inventée 1923-1931 (Œuvres complètes de Saint-Exupéry, tome III.* Paris, Éd. du Club de l'Honnête Homme, [© 1976], pp.283-379).

71) *Ibid.*, p.379.

に講演旅行でブエノス・アイレスを訪れたバンジャマン・クレミュー Benjamin Crémieux⁷²⁾の紹介で、アントワーヌは、アルゼンチンで財産を築いたグアテマラの出身の作家ゴメス・カリリョ Gomes Carillo の若い未亡人コンスエロ・スンシンと知り合った。彼はすぐに彼女に魅惑されてしまった。彼女の方も彼の男性的魅力に惹かれた。1931年の初めにフランスに戻った彼は、ヴァール Var 県アゲー Agay にある妹ガブリエルの家に彼女を連れて行き、家族に紹介した。間もなく彼女と婚約し、4月12日にアゲーの教会で結婚した。

結婚後、彼とコンスエロの非現実的な結婚生活が始まる。二人はそれぞれ独自に自由奔放な生活を送る。1936年、彼は彼女のそばにいるのが次第に耐えがたくなる。話し合った結果、彼らは別々に暮らすことにする。共同生活の解消によって、彼は安らぎを覚える。彼にとっては彼女のいるパリで別れて暮らすだけでは不十分であり、アメリカに行く。その後彼らは3度再会するが、共同生活に戻ることはなかった。

マリー・ド・サンテグジュペリ夫人は、『母への手紙』の「序文」で次のように述べている。「アントワーヌは結婚します。彼は、ブエノス・アイレスで、アルゼンチンの作家ゴメス・カリリョの未亡人と出会いました。エキゾチックで魅力的な女性ですが、非常に気まぐれで、一切の協力、知的な仕事が必要とする協力さえも拒否するので、共同生活は困難になります。しかしながら、アントワーヌは彼女を愛し、最後まで心遣いで彼女を包み込みました。『星の王子さま』とアフリカからの手紙がその感動的な証言です」⁷³⁾。王子は自分の肉体を脱ぎ捨て、魂だけとなってバラの花のもとに戻った。このバラの花のモデルはコンスエロであると言われる。

アントワーヌがもっとも深く関わった女性は彼の母である。マリー・ド・フォンクロンブ Marie de Fonsclombe は、数世代前から音楽を職業として来たプロヴァンス地方の一族の出であった。彼女は音楽のほかに絵画も学び詩作もした完璧な娘であった。彼女は、おばであるトリコー夫人の家で、保険監督官としてリヨンに住んでいたジャン・ド・サンテグジュペリ Jean de Saint-Exupéry と知り合い、1895年に結婚した。1904年、彼女の夫は41歳の若さで死亡した。このときから、5人の幼い子供を抱えての苦しい生活が始まった。

間もなく一家は、サン・モーリス・ド・レマンのトリコー夫人の城館に移った。彼女は金持ちで、一家の面倒をよくみてくれた。この時期、アントワーヌは母のそばで小さな王子のように振舞い、母の心をいつも自分に引き付けておこうとした。小さな椅子を引きずりながら母の後をどこにでも追い掛けて行き、彼女の座る椅子のそばに座り、物語を話してくれるようにせがんだ。

アントワーヌは作品の中で自分の家族についてほとんど語っていないので、彼の母につ

72) フランスの批評家 (1888-1944)。イタリア文学の紹介者として知られる。

73) SAINT-EXUPÉRY, *Lettres à sa mère*, p.23.

いて詳しく知ることはできない。しかし、『母への手紙』によって、彼にとって母がいかなる存在であったかを知ることができる。彼は大人になってからも、子供であったときと同じように母を愛し続けた。母と結ばれている強い愛情の絆が切れることをいつも恐れていた。母の手紙を受け取ることによって、自分に対する母の愛情を確認しようとした。母と別れて生活するようになってからは、手紙によってどこまでも母を追い掛け続け、死ぬまでそうした。彼は、人生の岐路に立ったときや困難にぶつかったとき、母に助言を求めた。母は、彼の求めに応じて適切な助言をした。

『母への手紙』の「序文」で母が語っているように、アントワーヌの生涯は闘いの生涯であった。それは彼自身が自ら選んだ生涯であった。彼はそのような生涯を選ばず、平穏な生涯を選ぶこともできたはずである。パイロットという当時としてはきわめて危険な職業を選んだ息子を、母は寛大に見守り続け、彼の選んだ道を容認し続けた。そのことは、『母への手紙』において公表された110通の手紙によって確認できる。自分が選んだ道を邁進して行く息子に対して助言を与えはしたが、その道に立ち塞がろうとはしなかった母マリー・ド・サン・テグジュペリは偉大な母であった。「序文」の最後で、彼女は次のように語っている。「私たちが持っているアントワーヌの最後の手紙の中に、次のような言葉があります。／『私が帰るとすれば、私の関心事はこうです——人間に何を言わなければならないか』。／私に彼の教えを共有することを決意させたのは、この言葉です」⁷⁴⁾（「序文」）。この言葉の中に、息子アントワーヌが選んだ道は彼にふさわしい道であったという母の確信、彼の生き方を容認することによって、息子と同じ道を歩むことができたことに対する母の喜びを読み取ることができる。母マリー・ド・サン・テグジュペリこそ、息子アントワーヌをもっともよく理解してくれた女性であった。

※論文中のサン・テグジュペリの生涯に関する部分については、エリック・デショッド (Eric DESCHODT) 著『サン・テグジュペリ、伝記』*Saint-Exupéry, biographie* を参照して記述した。

※ [] 内は編集者によって補足された。

74) *Ibid.*, p.31.